

# 写真と向き合った3年間

## みどりんぐ

大学1年生、18歳、大阪  
\*取材当時は高校3年生



高校で撮影研究部<sup>さつえいけんきゅうぶ</sup>に入って写真を始めたころ、部長のよっさんを含む3年生のチームが写真甲子園<sup>しゃしんこうしえん</sup><sup>1</sup>の予選を通過し、夏に開かれる本戦に進んだ。写真甲子園のことを話すよっさんたちがきらきら輝いて見えた。よっさんたちは被写体の人への接し方もうまいし、写真もすごい。

その理由を撮影研究部の顧問の花畑先生に聞いたら、「写真甲子園を経験してきた違い。1年生とは、人間的な幅の広さも深さも違う」とよっさん(右)



言われた。普通の高校生は自分の身の回りのことしか考えていない。でも、よっさんたちは写真甲子園の予選に応募する写真を撮るために、毎日、撮影に出かけ、写真をとおして学校以外の人や世界に触れていた。自分も、次の写真甲子園には絶対、参加したいと思った。だから、1年生が終わり、次の写真甲子園の準備が始まる時、迷わず参加を決めた。

なにをどう撮ればいいんだろう・・・

毎日、毎日、出かけて写真を撮った。でも、花畑先生や先輩たちに見せると、「これじゃ写真甲子園の本選には行けない。真っ正面からドカンと被写体に向きあってるだけ。その撮影に対する気持ちはいいけど、もっと背景を入れたり、いろいろなカットやアングルを混ぜたほうがいい。技術が足りない」と言われる。何をどう撮ったらいいのかわからなくなって、ちょっとしんどかった<sup>2</sup>。それでも、毎日、撮影に出かけるうちに、少しずつ技術が身についてきた。それまでは、知らない人にうまく話しかけられなくて人の写真はあまり撮らなかつたけど、人の写真を撮れるようになっていた。でも、結局、予選を通過することはできなかった。

このあと、みんなに写真がうまくなったと言われることが多かった。でも、わたしにとっては、「うまい」はほめことばではない。「おもしろい」って言われたい。この頃から、あまり写真を撮らなくなった。撮ろうかなと思っても、写真になったところを想像して、「おも

しろくないなー」と思って撮らないことが多かった。

そんなとき、学校のイタリア研修旅行に参加することになった。2年生の12月だった。花畑先生には、「これは次の写真甲子園の練習。ここでいい写真が撮れなかつたら、写真甲子園もだめだ」と言われた。モノクロフィルムを何十本も持って出かけた。7日間の滞在中、風景や人などいろいろなものを撮った。このとき、なんでも撮りたいという気持ちがまたわいてきた。撮った写真も、みんなに「いい」って言われて、自信がついた。「いいって思ったら、撮ればいいんだ」と思えるようになった。



2年生の12月に参加したイタリア研修旅行のときに撮った一枚

自分の気持ちが自然に入り込んだ写真を撮りたい

翌月、最後の写真甲子園への挑戦が始まった。前は、先輩たちが中心だったけど、今度は自分たちの力で作品をつくりあげられる。「組み写真の8枚全部、自分の写真で埋めるぞー。わたしの力でみんなを本選に連れてってあげるよー」って気合が入った。みんなで決めたテーマは、たこ焼き<sup>3</sup>。大阪らしさも出るし、たこ焼きと人との関わりも写せるから。

最初は、道頓堀<sup>4</sup>で、「元気はつらつ、たこ焼き食べてます」というコンセプトで、「はい、もっと大口を開けてくださいー」、「はい、こっち見てー」と指示を出して、演出した写真を撮っていた。

あるとき、家の近くの下町のたこ焼き屋で写真を撮った。自然な雰囲気でお店の人と会話をしているうちに、その人の人生もほんの少し聞くことができた。「何十年もここでたこ焼き屋をやっている」と聞いて、「あー、すごいな。このたこ焼き屋



たこ焼き

はず一とここにあって、このおじちゃんもず一とここで生活して  
るんだ」と感動した。そのときに撮った写真は、自分のそういう  
気持ちがず一と自然に入り込んだ写真だった。自分が撮りたい  
のはこういう写真だと思った。

### 自分なやってんねん!

写真甲子園への挑戦はとにかく苦しい。毎日、毎日、撮影に  
出かけても、思うような写真はなかなか撮れない。先生や卒業  
した先輩たちにもさんざんだめだと言われる。そのときは落ち込む  
けど、とにかく写真を撮らないといけないから、浸っているひまも  
ない。自転車でたこ焼き屋を回りながら、「自分なやってんね  
ん<sup>45</sup>」と自分に腹が立って、泣きそうになるのを自分の太ももを  
バーンバーンってたたいてこらえた。「自分がいちばんがんばらな  
いと!」って自分に喝を入れた。

そんなとき、よっさんが手紙をくれた。「学校が終わったら、撮  
影に行って、現像して……。そんな毎日になって、それを続けて  
いたら5月にはうまくなっているし、自然と8枚の写真が組めると  
思ったら、それは大間違いだよ。なんでたこ焼きを撮りたいと思っ  
ているのか、はっきりさせないとだめ。がんばれ!」って、すごく  
応援してくれた。よっさんは、わたしたちのことを本当によくわかっ  
てる、同じ気持ちで考えてくれてると思った。

### 苦しんで見つけたもの

わたしたちにとってたこ焼きってなんだろうと、ずっと考え続け  
た。下町のたこ焼き屋を撮るうちに、たこ焼きはただ大阪の名物  
というだけでなく、子どもから大人までみんなが食べていて、み  
んながたこ焼きに対して愛を持ってんじゃないかを感じるように  
なった。ある日、たこ焼き屋ののれんにぶらさがって遊んでいる  
女の子の写真を撮った。お母さんはお店のなかで働いている。



写真を撮り始めたばかりのころの作品。この頃は、真正面  
からドカーンと被写体に向かってた。花畑先生にも「おも  
しろいなー。性格が出る」と言われていた

最後の写真甲子園に取り組んだときに撮った写  
真。いちばん気に入っている写真の1枚



女の子はどこか寂しそうに見えた。古いお店のたたずまいも、歴  
史を感じさせた。見ていていろいろなことを考えさせられる写真  
で、自分でも納得できる一枚だった。

結局、みんなで選んだ予選の応募作品の8枚のなかに、わ  
たしの写真は一枚も入らなかった。写真甲子園の予選を勝ち抜  
くために、みんなで話し合っ、インパクトのある写真で8枚の組  
写真をつくろうということになった。そのときの8枚は、みんな  
これしかないって話し合っ選んだし、自信作だった。でも、本  
戦に進むことはできなかった。

写真甲子園に取り組んだ6ヵ月間、本当に苦しくて、しんどい  
毎日だった。それでも、これに挑戦しなかったら今の自分はなかつ  
たと思う。花畑先生のことばが胸に残っている。「『全然撮れない、  
うーん』って苦しんでいるときは実は階段を登ってるときで、階  
段のぼを登りきったそのときには自分が変わったのがわかる」。

### 見た人の想像が広がる写真を撮り続けたい

自分が下町で撮った写真は、自画自賛かもしれないけど、今  
見ても本当にいいなあと思う。インパクトはないけど、そこにそつ  
とたこ焼きがある雰囲気の写真で、撮ったときの自分の気持ちが  
伝わる写真だと思う。見ていて、写っている人の人生とか、その  
場の時間の流れとか、いろいろなことを考えさせられる。

大学では写真を専攻することに決めた。先生たちには高校で  
も専攻していた美術を専攻するよう勧められたけど、自分が一生  
かけてやるのは写真だと思うから。写真はその瞬間を切り取って  
記録するもの。たとえば、戦後のころの家をどれだけ絵で描いても  
「ふーん」で終わるけど、写真だと「おっ」て思う。それは、そ  
こにリアリティがあるから。わたしも、写真で今の時代を切り取っ  
て残したいと思う。見た人の想像力が広がるような写真を撮り続  
けていきたい。そして、はじめて口にするけれど、将来は写真家  
になって、自分の作品集を出したい!

### Notes

- \*1 参関“今日日本”。面向高中生的全日本摄影大赛，每  
年7月在北海道举行。在各地区的预选赛中获得胜的小  
组才有资格进入全国大赛。みどりんぐ(Midoring)  
所在学校的摄影研究部，组成志愿参赛的学生小  
组，每年1月左右确定题材，到截止日期的6月10日  
前，选定由8张组成的参赛照片。
- \*2 “烦恼、痛苦、累”的大阪方言。
- \*3 将面粉用调味汁打成糊状，中间放进切成小块的章  
鱼肉，烤成乒乓球大小的圆球形小吃。
- \*4 位于大阪市南部的闹市区，有很多餐饮店聚集于  
此。
- \*5 “我究竟在干什么？”的大阪方言。